

【日・モーセの復活】

ユダ 9 節に「大天使ミカエルは、モーセの遺体のことで悪魔と争ったとき、あえてののしって相手を裁こうとはせず、「主がお前を懲らしめてくださるように」と言いました。」と書かれています。一体何を争ったのでしょうか。ルカ 9 章の変貌の山の場面で、モーセとエリヤが登場します。エリヤは生きたまま天に上げられたことが記されていますが、モーセについては、申命記 34 章 6 節で、「主は、モーセをベト・ペオルの近くのモアブの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれも彼が葬られた場所を知らない」と書かれています。どこに遺体が葬られているのか、誰も分らないと書かれています。そのモーセがエリヤと共に現れたのですから、モーセは天に上げられたということになります。ただ、エリヤとは異なり、死んだあとに復活して、天に上げられました。その際に、悪魔はモーセの遺体のことで争ったのです。「もし、モーセの生涯が、カデシの岩から水を出す誓いを神に帰さなかったあの一つの罪で傷ついていなかったならば、彼は約束の地には入り、死を見ずに天に移されたことであろう。けれども、彼は長く墓の中にとどまらなかった。モーセを埋葬したみ使いたちを従えて、キリストご自身が天からおりてこられ、眠りについた聖徒を呼び起こされるのであった・・・サタンは・・・死者は自分のものだ」と主張した・・・このときはじめて、キリストは、死者に命を与えようとしておられた。いのちの君と輝く天使たちが墓に近づくと、サタンは自分の主権が脅かされるのを感じた。彼は悪天使たちと共に、自分のものと主張する領域を犯されまいとして抵抗した。キリストはサタンと論じられなかったが、そのときその場で、この墮落した敵の力を打ち破り、死者を生き返らせるみわざをお始めになった。ここに、サタンの言い争うことのできない神のみ子の権威が現わされた。永遠に復活が確かなものとされた」 人類のあけぼの下 P95～97

【月・旧約聖書の二つの復活】

旧約聖書の中に二人の子供が復活した出来事が記されています。一人はエリヤが貧しいやもめの家で食事の世話を受けたとき、そのやめもの子供が突如しんでしまうのです。それでエリヤは「主よ、この子の命を元に戻してください」と祈ります。すると主はエリヤの祈りに答えてくださり、その子の命を元にお返しくださったのです(列王記上 17 章)。また、もう一人は、エリシャが裕福な女性の子供を同じように生き返られます(列王記下 4 章)。どちらのケースも、復活してモーセのように天に上げられたわけではありませんが、神様には復活の力があることを証明するものでした。またどちらも異邦人の子供でもあり、一人は貧しく、一人は裕福であったことから、主の復活に与かるのは、民族の違いや貧富の差に関係がないこともわかります。

【火・ナインのやもめの息子】

新約聖書の復活では、ナインのやもめの息子、ヤイロの娘、そしてラザロの 3 人がいます。みなイエス様が直接復活させてくださいました。ナインのやもめの息子のお話は、ルカ 7 章にできます。

ルカによる福音書 7 章 13～15 節

「主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。」

イエス様がナインという町に行かれた時、あるやもめの一人息子が死んで、棺が担ぎ出される場面に出くわします。イエス様は母親を見て憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われたのです。そして、棺に近づいて手を触れ、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われると、死んでいたはずの息子が生き返ったのです。この奇跡で注目すべき点は、母親がイエス様に助けを求めていなかったという点です。イエス様の憐みによって息子は復活したのです。

【水・ヤイロの娘】

イエス様がヤイロの娘を復活させられた出来事は、まだ生きていたときにイエス様に助けを求めたという点が、これまでの奇跡とは異なります。マルコ 5 章 23 節で、ヤイロがイエス様に、「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」と、しきりに願います。そこでイエス様はヤイロと一緒に娘のところに行かれるのですが、その途中、12 年間出血が止まらず苦しんでいた女性がイエス様の衣に触って癒される奇跡が起こるのです。ヤイロの娘は一刻を争うような状況でしたが、イエス様は足を止められて、この女性に話かけられるのです。そうしている間に、ヤイロの娘が亡くなったという知らせが入ります。しかし、イエス様は「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われたのです。死に際して「恐れることはない」と言えるのがキリスト教です。復活の希望があるからです。またイエス様は、「子供は死んだのではない。眠っているのだ。」とも言われました。神様を信じる者にとって、死は眠りに過ぎません。必ず目覚めの朝を迎えるからです。

【木・ラザロ】

ラザロの復活も、ヤイロの娘と同様に、生きている時に助けを求められます。ところが、イエス様はラザロが危ないと聞いてから、なお2日間も滞在し、到着したのは死んで4日もたったあとでした。これはどうしてなのでしょう。イエス様は、ラザロの知らせを聞いた時、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」(ヨハネ11:4)と言われました。つまり、初めから復活させることによって神の栄光を表すおつもりだったのです。しかし、そのようなことはマルタやマリヤにはわかりません。二人は、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言います。ここで重要なのは、主は決して遅れたわけではないということです。ラザロを忘れていたわけでもありません。主のご計画はちゃんと進んでいて、一番良いタイミングで来られたのです。